

佳作賞

「半家族」

『異土』14号

湖海かおる氏

湖海かおる（こかい・かおる）

一九六〇年十一月三日、大阪市生まれ。

一九八三年、武庫川女子大学文学部国文学科卒業。

一九九六年、大阪文学学校入学。同年、「文学表現と思想の会」入会。一九九九年、同人誌「白鴉」参加。

二〇〇二年、大阪文学学校研究科修了。二〇一一年、実質的に『白鴉』での活動終了、自動退会。同年、同人誌『異土』創刊時より参加。

が書類を役所に行くことになる。明後日は、入院中の夫が整形外科で手術を受けるので、明日は術前の面談もある。必要な用件をすべて片付けてしまわねば、と気を引き締める。一郎の病名は脊椎管狭窄症で、四肢にしびれや違和感がある。術前の面談にも関わらず、何事にも自分本位で合理主義の夫は、自分の気のすむようにしなければ、納得できない。執刀医に不満げだ。菊江は、巻き込まれないよう警戒する。その後役所に回って年金の窓口で説明を乞う。係の若い女性は、申請手順を事務的に説明する。菊枝の鈍い応対にいらだつのか、書き込みの少ない申請書を平気で提出する者、窓口で二時間かけて空欄を埋める者等々、能率的でない申請者の例を冷ややかに述べる。菊江は妹の申請が成功するのか、前途を思いやる。一郎の手術は成功し、覚醒した途端、異常に興奮して饒舌になる。菊江はまりあを生んだ日を思い出す。一郎は人生初の手術を体験して、意外にも、菊江の出産時に気遣いが足りなかった、と後悔して涙する。だが、回復するにつれて、普段のわがままが戻ってくる。

メイコは発病過程の自己申告書を書く。書くとき疲れて混乱してくる。以前の出来事を思い出すのは苦痛だ。普通科高校に通学していた時に秘密を同級生の前で暴露されて以来、精神的に不安定になる。療養しながら通信制高校に転校し、卒業する。通信制大学も卒業した。就職するが、人

五十を過ぎた菊江は、妹メイコと夜はテレビを見るのが習慣だ。七歳年下で未婚のメイコは、菊江の家に居候している。番組の「いせこみ」という言葉、少女時代に話が及ぶ。今は亡き母が、洋裁上手だったという記憶から、話題は意外な展開になる。お互いに母への思いに微妙な温度差がある。母と入浴中、湯に浸かりながら、妊娠を告知された時の違和感がいまだに消えない。三年間、菊江は精神疾患になったメイコの療養を支えてきた。居候生活が長期に及ぶことに危機感をもつ。一人娘のまりあは通信制高校を卒業したが、それ以来就職もせず家にいる。発達障害ゆえに仕方ないと思うが、将来は心配である。娘と義妹について、夫の一郎は経済的な自立をさせよ、と頻りに詰め寄る。メイコの主治医には以前から、障害者年金受給申請を依頼している。せつかく書類を揃えて申請するからには、確実に受給決定になるよう、有利な状況を見定めて手続きをすべきで、良いタイミングで診断書を書く、と主治医は主張してきた。メイコが住む地域は、審査が厳しくて障害者年金の申請決定率が全国ワースト上位に入ららしい。一郎から意見されるたびに、菊江は主治医の意見を述べてきた。が、審査の環境に変化があり、診断書作成にゴースインがある。メイコは外出も他人との対応も嫌がって、結局菊江

間関係に悩む。母親が脳梗塞で倒れ、介護を手伝う。阪神大震災を経験する。メイコは母を亡くしたショックが強く、父の年金に頼って暮らすうちに引きこもる。ポヤ騒ぎがきっかけで家を出奔する。高速バスで新宿に行くつもりが、手前で降りてしまい、高速道路で保護され、所轄の警察署で一晩過ごす。が、迎えに来た菊江を振り切つて逃げようとしたので再び保護され、そのまま紹介された精神科の病院に入院した。二か月後退院し、それ以後菊江の家で暮らしている。

ある日、菊江は一郎を見舞おうと病院に行くと、エレベーターの中で、土田さんに会う。土田さんは菊江が住むマンションの隣にある土地を借りて、野菜を作っている。収穫したての野菜をなんでも一袋百円で売っている。時間差で、マンションの自治会で知り合った花城さんも訪れた。二人には一郎の入院先も期間も知らせなかったのに、お見舞いに来てもらった。一郎がリハビリから戻るまで、いつものまにか、ふたりの内輪の事情を聴き、菊江もメイコとまりあのことを少し話した。一郎の退院祝に、まりあの発案でインド料理店に行くことになる。メイコは申請に必要な書類を揃えるが、体調がすぐれず菊枝が主治医の元へ、書類の正誤を確認しに行く。菊江自身もうつ病、と病名がついている。うつ病くらいでは障害者年金受給申請しても無理だ、と菊江の精神科主治医の話を思い出す。